

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2020.3) 令和元年度:81.

エンドオブライフケアにおけるがん相談員の役割

鎌仲 知美, 澤田 裕子, 尾崎 靖子

エンドオブライフケアにおけるがん相談員の役割

○鎌仲知美^{1) 2)} 澤田裕子^{1) 2)} 尾崎靖子^{2) 3)}

旭川医科大学病院 1) がん相談支援センター 2) 腫瘍センター 3) 緩和ケア診療部

【目的】A病院がん相談支援センターにおけるがん相談支援実践の過程を振り返り、がん相談員の役割である「相談者に科学的根拠に基づいた信頼できる情報提供を行うことによって、その人らしい生活や治療選択ができるように支援する」が有効であったか評価する。

【事例概要と実践方法】

症例は右乳がん術後2年余りで再発した40歳代の主婦。

乳がん再発から転院までの2年間の病院診療録(看護記録)およびがん相談支援センターの相談記録から相談内容と対応をデータ利用した。

【結果】

①がん治療と仕事の両立が困難になったことで世帯の経済状況は逼迫した。社会保障制度の情報提供から障害年金申請を希望、社労士と連携し申請に関する支援を行った。②多発骨転移により自宅で体動困難となったため早急に主治医とコンタクトをとり各方面へ受診調整した。③当時40歳まで数か月あり、介護認定までの期間の福祉用品レンタルや介護認定に関する相談対応を継続ケア看護師に依頼した。④治療変更時、治療の副作用やセルフケアなどに関する情報提供を行い意思決定に繋げた。⑤終末期療養場所について患者家族間で話し合いが進まなかったことから療養環境について情報提供、療養場所を自ら選択した。

【考察】

エンドオブライフケアはその人のライフ(生活や人生)に焦点を当てること、患者・家族・医療スタッフが死を意識したときから始まり、共に治療の選択に関わり、多様な療養・看取りの場の選択を考えるという視座を持つことが重要といわれる。本症例において疼痛・症状マネジメントや治療選択時の意思決定支援は看護師であるがん相談員の強みが最大限に発揮できた場面である。さらに社会保障制度の活用、療養環境調整、患者・家族が先延ばしにしがちな療養場所の相談など、がん相談員と多職種が密に連携、サポートしたことは患者・家族の望むライフ実現において有効であった。